

ブリヂストン・フアイアストンタイヤ事件の核心に迫る
欠陥タイヤや事実隠蔽の

「爆

弾 資

料

訴訟の焦点は、「いつ欠陥がわかったか」

ブリヂストンの米子会社、ブリヂストン・フアイアストンがフォード車に装着した同社製のタイヤを大量にリコールした問題は、昨年、日米で大きな波紋を広げた。現在、米国内では事故の被害者による損害賠償訴訟が相次ぎ、その数は二〇〇件に達しようとしている。これらはインディアナポリス地裁に集約され、担当のサラ・バーカー判事によって審判が開始される予定だ。その内幕については、本誌二月二日号に詳しく紹介した。

問題が発覚して以来、フォードとフアイアストンは膨大な量の内部資料を米政府当局に提出した。それをもとに米政府当局は、事故の真相究明を進めている。その最大の焦点になるのは、

疑わしきは徹底的に調査し、迅速に対応し、情報を公開する……。その基本動作が身につかないまま世界市場に出れば、どのようなリスクが待ち受けているか。今回入手した内部資料は、日本を代表する「グローバル企業」ブリヂストンの危機管理に対する「甘さ」、消費者の声に対する「鈍さ」を露呈した。

「一挙公開！」

フアイアストン、フォードがいつの時点で欠陥を知り、どういう対策を取ってきたか。つまり、「両社の隠蔽工作はあったのか」ということである。仮に隠蔽工作があった場合、裁判ではきわめて苦しい立場に置かれ、彼らが払う損害賠償金額は大きく膨らんでいく。

「フォードの社内メモ」

「エクスプローラー・タイヤについて」と題するフォードの社内メモには、南米ベネズエラで発生したトレッド・セパレーション（タイヤ表面が剝がれ落ちること）への同社の対応が記録されている。

これによると、一九九七年七月、ベネズエラの首都カラカスで、フォード関係者とユーザーの代理人の弁護士たちとの会議が開かれたという。

走行中の車のタイヤが突然爆発して横転する事故について、フォードの見解を求める目的だった。

このとき、ベネズエラでのフォード製エクスプローラーの事故はすでに六

ジャーナリスト

徳本栄一郎=文

text by Eiichiro Tokumoto